

滝沢克己著「キリスト論の根本問題」(翻訳) (2)

芝田豊彦

(内容概観)

Ⅲ. イエス・キリストのペルソナ¹⁾についての聖書の叙述の由来と真理

C. 聖書の叙述は「神話論的」であるか、またどの程度までそうなのか

- 1) 使徒によるイエスの生の叙述における際立ったものと惑わすもの
- 2) 同じ叙述の方法における神話論的なものと学問的なもの
- 3) イエス・キリストのひとつのペルソナにおける福音の徴と事柄

Ⅳ. イエス・キリストのひとつにして三重のペルソナという光のもとで 現在の神学的状況への一瞥

A. 伝承されたキリスト教一般に対して帰結すること

- 1) キリスト教のいわゆる「絶対的排他性」について
- 2) カトリシズムとプロテスタント的聖書原理について
- 3) 聖書のイエス像の歴史的正しさの問題について

C. 聖書の叙述は「神話論的」であるか、またどの程度までそうなのか

ところで上で説明されたように、「神-人」(Gott-Mensch)という使徒的な概念をまさに際立たせるのは、「ナザレのイエス」という人物〔ペルソナ〕において、この概念が、歴史の内部で一度限り規定された或る出来事の表象と分かちがたく結びついている、という点である。それは、例えば円の方程式が、円に対応する図形と分かちがたく結びついているのと同様である。使徒たちは神-人という概念を、地上で現実に体験したかれらの師の生涯、すなわち時間的-空間的に規定された・一歩ずつ行為と言葉を伴って描かれた・ひとつの形姿に対する説明として、初めて発見したのであった。つまり、比類なく実在的で・永遠に働く・その形姿からきびしく区別されているにもかかわらず・形姿それ自身のうちに現実に含まれている・その形姿の原因から、〔その形姿を〕まっ

たく統一的に真に説明するものとして発見したのであった。あるいはむしろ神一人という概念は、使徒たちの内において、この原因それ自身の必然的な働きとして、聖霊の驚くべき賜物として、発生したのであった。要するにわれらは、その概念を発見したというより、むしろ受け取ったのであり、それはマリアがイエスを受胎したのと同様であった。永遠の神ご自身を、真に（wahrhaftig）肉ないし我々自身とひとつと見なす（halten）ことは、我々が同時にひとつの比類なき形姿に遭遇することがなければ、けっして起こり得ない。そのような比類なき形姿は、我々の形姿とまったく同様に、時間的-空間的に（歴史的-社会的に）規定されているが、我々すべての人間とまったく対照的に、肉においてみずからを啓示される神ご自身の形姿であり、そのような形姿によってのみ、生まれつき肉である我々は、今ここで神の要求に呼応して、みずからを形成できるのである。このような真と見なすこと（Fürwahrhalten）の対象が、聖書の表現によれば、「イエス・キリスト、神の子」なのであった。すべての懷疑から解放された・明晰かつ判明な・神一人という概念が、或る特定の形姿ないし或る特定の連続する人間的な行為と言葉というまったく素朴な表象と分かちがたく結びつけられていること、これこそが驚くべきほど実在的なものであり、キリスト教信仰の際立ったものなのである。

しかし、注意せよ、歴史内部的に際立ったものは、我々の肉にとって常に、人間存在の限界を踏み越えるように誘惑するきっかけなのである。それ故に、キリスト教信仰においてこの地上に現われた際立ったものも、その例外ではあり得ず、神一人という概念は、キリスト者自身にとってむしろ躓きへのきわめて危険なきっかけとなり得る。

なぜなら、繰り返し述べたように、使徒たちの関心の焦点は、眼に見え得る、いやそれどころか、みずからの指でしばしば触れられたこともある〔イエスという〕ひとりの人間の形姿にこそあったからである。使徒たちは、神と人のあいだの実体的ないし作用的な永遠の統一を、〔イエスという〕この形姿それ自身を構成する契機としてしか考えつかず、承認せず、そしてそのような契機とし

て公に宣べ伝えた。このことは、かれら自身のもとでは、とても自然なことであり、まったく当然のこととして起こったのである。しかし、まさにこのことから、我々にとってほとんど避けがたく次のような誘惑的な見かけが生じる——あたかもイエス・キリストのペルソナにおける第一の永遠の契機が、それ故にまた第二の永遠の契機が、第三の契機とともに、すなわちかれの時間内部的な特殊な形姿とともに、初めて生じたかのような見かけ、あたかも第一と第二の契機が、マリアによるイエスの受胎ないしイエスのマリアからの誕生という特定の日に初めて、最初で最後に、実在的ないし有効的になったのであり、それまではそれ自体ひとつの空想、せいぜいひとつの曖昧で無力な可能性にすぎなかったかのような見かけが、生じるのである。

その際、「言が肉となった」は次のように解釈される。人間の歴史に対する決定的なことが、当時、たんに世界内部的に起こっただけでなく、あるいは同じことであるが、驚くべき人間の形姿が歴史の内部で事実的に発生しただけでなく、神の永遠の言それ自体も、あたかも「何らかの仕方」で動いて変化し、そのことによって、たしかに「比較を絶した仕方」においてではあるが、我々に対して、すなわち肉や地に対して、それまでよりも「より近く」にやって来たかのように解釈されるのである。しかしそれでは、肉はその時まで、肉の自己意識に関してのみならず、肉それ自体においても、主なる神からまったく隔たったどこか或る所に、それにもかかわらず現実的に事実存在していた、と謂うことになるであろう。しかしそのようなことは、まさに、低俗的-人間的で「異教徒的」な考え方、イエスのペルソナに対する信仰によってほんらい根絶されるべき考え方ではないであろうか？

否、「言が肉となった」とは、上に述べたところから明晰に見て取れるように、二千年前に、マリアによるイエスの受胎によって、言ないし肉が実体的に以前と異なるものになった、などと謂うことではあり得ない。そうではなく、それはただ以下のことを意味している。かの受胎は、神と人のあいだの実体的な統一即区別という永遠に現在的な要素 (Element) から、その同じ要素へ向

けてのみ（したがってマリアにとっては絶対に不可避的であるが、まさにそれ故にまったく自由意志的に）起こったということ。〔イエスという〕同じひとつの肉ないし同じひとつの本性は、それが創造主なる神のものである限りにおいて、まったく汚れなく天に属するが、それがただそれ自身〔の肉という本性〕に帰属する限りにおいて、まったく罪と悪に染まっているということ。したがってイエスの生、地上におけるかれの言葉とかれの行為は、我々の生と同じく、実際に肉的で地上的であり、そう〔=肉の、地上的〕であるが故にのみ、我々によって正しく知覚され、理解され得るということ——このことは、全能の創造者なる神が、肉の形姿をとることによって、ご自身を我々にとって見ることができ、聞くことができるようにして下さったことによるが、しかもそれは、虚無への絶えざる誘惑にもかかわらず、永遠の昔から我々各人を支え、召し、慰め、戒めてくださるかれご自身へ (*zu Ihm selbst*)、我々を連れ戻し、日々新たに生かせるためなのである。

これが聖書の叙述によるイエス・キリストの福音である。我々はそれを「神話」と謂うべきであろうか。——もちろん謂うべきではない、もし「神話」という言葉が、ひとつの人間的な虚構しか意味せず、客観的に実在する真理、すなわち、語り手の意見や主張にまったく依存しない真理と何の関係もないのであれば。なぜなら、「汝の罪赦されたり、起ちて歩め」、あるいは「すべて労する者、重荷を負う者、我に来たれ、われ汝らを休ません」〔マタイ11章28節〕というイエスの福音が、私やすべての事実存在する人への〔罪の赦しを与える〕神の語りかけ (Zuspruch) であるのは、私がそう思うからでも、福音書記者たちがそう信じたからでもない。そうではなく、まったく逆に、かれらがこの真理に目覚める前に、いやそれどころかかれらがそれをあざ笑った時にすでに、その福音がそれ自身で実際にすでに真であったが故に、その故にのみ、福音書記者も私も福音を真と見なしたのであった。その限りにおいて、聖書の叙述の真理は、直角三角形の辺に対する数学的表現〔=ピタゴラスの定理〕の真理とまっ

たく同じである、あるいはもっと素朴に表現すれば、何らかの或る感覚的事実の単純な確認とまったく同じである。しかし、たんに同じであるというわけではない。なぜなら、聖書の表現、例えば「言は肉となった」という表現は、或る感覚的事実のたんなる確認でも、その他で起こるような或る抽象的真理の発見ないし証明でもなく、むしろ、或る特定の空間と或る特定の時において事実存在するひとりの人間の特定の形姿(もろもろの言葉と行為)を、その形姿の実在的な発生根拠ないし発展根拠から、真に本質的に説明したのだからである。この発生根拠ないし発展根拠が、根拠それ自身をその人間的形姿において身体的に顕らかにし、まさにそのことによって、その人間的形姿の聖なる本質をも顕らかにしたのである。しかしその人間的形姿の聖なる本質とは、まさにこのこと、すなわち、その人間的形姿において、神の・地上において事実存在するひとりの人間としての・行動と、同じ人間の・創造者なる神を表現するひとつの被造物としての・行動が、逆にできない区別においてであるが、まったく同一であるということである。このことが意味するのは、人間的形姿がみずからの本質と意味をこの神の像(Imago Dei)²⁾から受け取るということであり、したがって、この神の像を通してのみ、被造的世界(すなわち歴史)一般の最内奥の本質が、具体的-包括的、積極的-一義的に規定されて、我々に顕らかになるということである。まさにそのときに初めて、歴史的世界そのものが、それにふさわしい真の方法に従って、歴史的世界のまったき・事実に-存在的な・深さと広さにおいて、まったく積極的-学問的に探究され、取り扱われ得るのである。

このようにイエスの形姿の聖書的な叙述は、その形姿の最内奥の本質を實在的に説明する真の方法であり、それを通してのみ、人間の歴史、そればかりか被造物の歴史一般が、そのまったき現実性において学問的に探究され得るのである。その限りにおいて、聖書的な叙述を、他の個別的な諸科学の原則的な叙述と、それどころか典型的な諸事例さえ伴う叙述と比較することを、それぞれの科学の独自の対象ないし領域に関して、安んじて行なうことができる、しか

も特にK・マルクスの『資本論』と比較することができる——このことに対してはあらがう人もいるが！——かれの資本論は、私の考えでは、たしかに歴史的な所与の資本主義社会を、かれの探究の対象にしているが、すなわち、かれの探究の端緒にして目標にしているが、本来の歴史的叙述を与えるのではなくて、むしろ資本主義社会の真の本質的な説明を、資本主義社会の・隠れてはいるが・そのみが実在的な・発生根拠ないし発展根拠（すなわち人間的労働の・それ自身において弁証法的な・本質）から行なっている。他方でその説明は、同時に、18～19世紀のイギリス社会から取り出された典型的な諸現象を用いて、きわめて生き生きと活写しており、そのような説明として、まず個々の資本主義的社会形態、それとともに他のすべての経済的社会形態の歴史的研究に必要な方法を、提供してくれるのである。かれの説明によれば、資本主義の本質はたしかにユダヤ教の本質と比較できるであろう。なぜなら、後者〔ユダヤ教〕において、人間的存在それ自身の本質に対するもっとも深く隠された根源的な規定が、きわめて倒錯した形態においてであるが、まさにそれ故にかくも典型的に、顕らかになったからである。その結果、ここ〔=ユダヤ教〕ではいずれの人間も、かれ自身の生の唯一つ実在的な根源からきわめて強く呼びかけられて、決断するのである。すなわち、見かけは敬虔であるが、現実にはまったく倒錯したかれの現在の生き方を、根柢的に転換することによって、永遠のいのちへ、つまり真に人間的ないのちへ到るか、あるいは逆に、同じ虚無的な道を通して、永遠の死に向かってそのまま歩み続けるか、という決断である。同じように、資本主義社会における人間的労働の根源的な生産の本質も、たしかにまったく倒錯した形態においてであるが、これまでまだ一度もなかったほどに、直接かつ誤認すべくもなく顕らかにされ、そこでは各人が決断を要請されているのである。すなわち、人間的労働の本来の本質に呼応して、見かけのみ自由な資本主義的な生産様式を根柢的に転換することによって、真に自由な、まことに約束に満ちた社会主義的な社会に到達するか、あるいは、同じ〔人間的労働の〕本質に逆らって、現在の社会形態に頑なに固執することによって、

最終的破局に向かって流されて行くか、という決断である。ただ、『資本論』においては、分析の対象が、経済的な生産的労働の結果以上の何ものでもない、そこでは全体的な人間的生、すなわち、人間的生の唯一つ実在的な要素(Element)はもともと問題となり得ない——この要素から、またこの要素の内部でのみ、技術、経済、政治および宗教(ないし精神的文化)といった人間的生のさまざまな側面が、必然的に関連するとともに区別されて発展し得るのである。この要素に関して、「マルクス主義」はまだ厳密な客観的-批判的な学問にまで成熟しておらず、現代のイデオロギーのひとつ、せいぜいのところ、直感的な・今日かくも一般に流布した・ヒューマニズムの一種にすぎない。そのようなヒューマニズムは、たしかにとても健全で鋭敏なこともあるが、あまりにしばしば病的かつ狂信的になり得るのであり、必ずしも十分に積極的に明らかにされておらず、空虚なものをみずからの内に含んでいる。そのことが、一方の理論において、もろもろの社会科学におけるマルクス主義本来の領域にまで遡及的に作用し、資本主義社会それ自体の分析をイデオロギー的に歪め、他方で、現実の生活や政治さえも維持しないような働きをなすだけでなく、よき意志と輝くばかりのスローガンにもかかわらず、あまりにも容易に人間を、病的な憎悪に満ちた日和見主義へ陥らせるのである。

それゆえに確実に言い得るのは、「言が肉となった」等のイエスの生の聖書的説明は、古代の「前-学問的」ないし「非-学問的」な観察の仕方という意味での「神話論」などではけっしてなく、かのまったく隠された・永遠に新しい・あまねく実在的な・要素(Element)という唯一の真理について、今日きわめて切実に要求される学問的理解を、我々に与えてくれるということである。この要素から、この要素の上でのみ、イエスの地上での生も、すべての人間の生も、それとともに時間的な歴史一般も、現実が発生して展開し得るだけでなく、まことに実在的に理解され得るのである。

しかしまさにそれ故に、他方で、この同じ叙述を「神話的」と呼ぶことを、もしこの術語が次のような意味で理解されさえすれば、まったく恐れる必要は

ない。すなわち、神話が、感覺的に確認し得る歴史的な事実を歴史学的に書き留めたものでも、何らかの或る経済的な生産様式等の説明でもなく、全体的な人間の生についての理解、ないし人間の生のまことの初めと終りについての宣べ伝え、すなわち、神および〈この世界の・神によって規定された・実在的な意味〉についての宣べ伝えに関わる——それだけに関わると言わないまでもとりわけそのことに関わる、ということである。この意味において、イエスの生の聖書の叙述はたしかに「神話的」と呼ばれ得るが、福音書記者たちは、そのようなことをほとんど意識しておらず、ただ、かれら自身によって見られ触れられた〔イエスという〕このひとりの人間を、かれが実際にあったように叙述することだけに関心があり、したがって、かれに対するみずからの信仰を、ましてや何らかの哲学を、現実起こった諸事実を犠牲にして宣言することなど、考えることさえなかったのである。かれは、福音書記者たちにとって、実際に次のような御方であった。すなわち、「最後の日に再び来られる」のであり、そのような御方として今もまた、まったく隠れているが、 sacramentにおいてまったく実在にかれらのもとにおられる、そのような御方なのであった。しかし、福音書記者たちのたんに感動的のみならず実在に即したこの意識も、そこに含まれている大なる真理も、次の事実を変え得るものではない。つまり、かれらによって遂行されたイエスの生の叙述が、その本質において、精確な歴史(学)ではなく、むしろ神話である、あるいはこう言った方がよいかもしれない、すくなくとも共観福音書の記者たちにおいては言ひ伝え (Sage)³⁾なのである。ただし、言ひ伝えの方が、神話と比べると、一般的な言葉の用法において、過ぎ去った印象深い出来事それ自体を素朴に物語るという側面が、その出来事の技巧的な説明ないし芸術的な再構成という側面より大きい限りにおいて〔「言ひ伝え」と言えるの〕である。しかし強調しておきたいが、このことは、次のこと以外の何もかも謂っていない。すなわち、聖書の叙述に含まれている真理、そのような真理として、上で我々によって展開されたところの大なる真理は、時の内部で「一度限り」(ein für allemal) 起こった行為ないし形

姿そのものを、歴史的に確認するような真理ではなくて、この同じ形姿に対する真の理解という〔意味での〕真理である。すなわちこの同じ形姿を、〈創造者にして救済者である神と事実存在する各々の人間とのあいだの・絶対に隠されているが永遠に現在のな・統一〉からの積極的で必然的な働きとして、理解するのである。あるいはこの同じ形姿を、かの大いなる驚くべき事柄それ自身のひとつの真の徴として、理解するのである。それ故にこの徴は、根柢において、永遠の神ご自身の歴史的な行為ないし特殊な啓示と呼ばれなければならない、そのようなものとして同時に、まことに「時の徴」(マタイ16章3節)であり、それを目の当たりにして「多くの人のこころの思いが不可避的に顕らかになるように定められている」(ルカ⁴⁾2章35節)のである。

イエスの形姿は、徴(Zeichen)として、事柄それ自身(Sache selbst)から厳密に区別されるべきである。この形姿は、反射する光として、それ自身で絶対的に輝く光そのものと取り違えられてはならない。このふたつはお互いから分離され得ないということ、イエスの形姿は事柄それ自身の完全な徴であると同時に、形姿それ自身の根源的で永遠な本質を純粹に実現するものであったということ、そしてそのような形姿として、他のすべてのものとラディカルな対照をなして、唯一の尺度として働き、この世における他のいずれのものも、その形姿によって測られることによってのみ、それぞれみずからの積極的ないし消極的な価値を得ることができるということ、等々、これらすべてのことは、イエスの形姿がやはり一個の徴であり、絶対に自立的ではなく、ただ事柄それ自身から事柄それ自身へ向けてのみ、イエスの形姿それ自身の根源的な本質を媒介にして、この時間的な世界の内部で発生し、消え去ってしまったということ、何ら変えるものではない。そのような徴として、イエスの歴史的な形姿は、他のいずれの形姿、たんに人間的形姿のみならず、一般に個々の被造的な形姿とも、まったく同じ平面上にある。

唯一無比の・絶対的な区別と不可逆的な秩序をそれ自体のうちに含む・神と

人間との統一を、直接的、必然的に反映するものとして、たしかにこの徴世界 (Zeichenwelt)⁵⁾ においても、唯一無比の活ける秩序が支配している。その秩序において、イエスの形姿と我々自身の形姿は、例えば精神的な動力学のふたつの極のように、不可逆的な区別を介して、お互い関係し合う。しかし、このふたつの形姿のあいだの諸関係は、排他的かつ不可逆的であるが、相対的な徴世界の内部のことであり、創造者である神ご自身と人間のあいだの絶対的、実体的な関係とはまったく異なるものである。あるいは別の比喩を挙げると、創造者と人間との関係において、絶対的な光それ自身は、絶対的な区別を介して (すなわち、創造者なる神に仕える限りでの無を介して)、絶対的な闇と直接的かつ実在的にひとつであり、後者 [= 絶対的な闇] は、いわばその裏面において、かの唯一の光それ自身によって常に覆われ、この同じ闇の内部でそれ [= 唯一の光] が現象するためにのみ、現に存在するのである。しかし、徴世界の内部では、もろもろの光だけが現に存在するのであって、それらの光は、絶対的な闇の内部で、かの唯一の光のたんなる反照として、お互い関係し合う、あるいは、ありとあらゆる誘惑的な鬼火 (すなわち、人間によって濫用されたもろもろの光) に関係する。この諸関係は、常に時間的に相対的な関係であって、唯一の光と単純な闇のあいだの・かの根源的-直接的な関係の、普遍的-永遠的で瞬間ごとに現在の働きのもとでのみ、発生し、展開できるのである。

時間的-相対的な諸関係に関しても、もちろんなんらかの「永遠的」な性格について語ることができる。なぜなら、これらの諸関係ないし相互に関係しあう諸契機は、絶対に実在的な永遠ともろもろの瞬間のあいだの実体的統一の徴として、必然的に、一方で瞬間的、他方で永遠的、あるいは一方で受動的-被造的、他方で能動的-創造的だからである。このことが、具体的-実在的な意味で、まさに「時間的」および「歴史的」と謂うことである。しかし、時間的なものの「永遠性」は、永遠それ自身の瞬間的な反映としてのみ、実在的に存在することができる。瞬間ないし被造物は、踏み越えることのできないまさにこの限界を介して、それ [= 瞬間ないし被造物] と直接的に結びついている永遠

ないし創造者を、瞬間的な世界の内部で反映するためにのみ、現に存在するのである。それ故に、この同じ瞬間は必然的に時間内部での現在であるが、それはそれでまた必然的に、それ自身の過去からそれ自身の将来へ、或る特定の形姿から或る特定の形姿へ、一步一步とどまることなく過ぎ行く。初めと終り、永遠なるものと過ぎ去るもの、より高次なものとより低次なもの、完全と不完全、尺度と〔尺度で〕測られるもの、正義と不正義、真理と誤謬、これらはすべて時間の内部で、その実在性と非実在性、その意味と反意味を、かの要の点〔すなわち、創造者と被造物を区別するとともに結びつける関係点〕からのみ受け取るが、その点では、永遠と瞬間、創造者なる神とその被造物は、前者〔=永遠ないし神〕それ自身によって定められた聖なる限界を介して、直接的にひとつなのである。この要の点は、絶対的な意味でアルファでありオメガであるが、我々が上で詳述して明らかにしたところによると、イエスのひとつのペルソナを構成する第一の契機なのである。この第一の契機は、同じくイエスのひとつのペルソナを構成する第三ないし第二の契機、すなわち、イエスの地上の形姿〔=第三の契機〕ないしその形姿において啓示された人間の永遠的な原型〔=第二の契機〕から、きわめて厳密に区別されなければならない。

「聖霊によりマリアの受胎によって生まれた」というイエスの地上の形姿は、いずれにせよ時間内部的な徴世界に属する。我々は永遠の基盤の上に絶対に否応なく立てられて、そこにおいて自由に自立的に生きかつ歩むのであるが、イエスの形姿は、永遠の基盤それ自身ではなく、基盤それ自身の主によって・その上に・そこからそこへ向けて・立てられた・ひとつの完全な道標にすぎない。しかしその道標は、イエスの全面的な挫折にもかかわらず、それ自身、現実に事実存在する各々の人間的生の・永遠に活ける原型、また尺度であり続ける。イエスの形姿は、その言葉と行為においてかくも完全で聖なる道標であるので、我々がそれについてひとたび聞いたならば、その形姿を受け入れるか退けるかということは、我々人間にとってどうでもよいような要件ではあり得ない。イエスの形姿に対してみずからが無関心であると感ずることが、すでにそ

の形姿を退けるのと同じであり、狡猾で、それ自体愚かな拒否の一形式であろう。なぜなら、その形姿は、全能の主なる神ご自身が現実に事実存在する人間的形姿において語る言葉 (Spruch) だからである。その語る言葉は、私をけっして見捨てることはなかったし、私もそれからけっして——自殺によってさえも、ましてや何らかの仕方でも時間的-空間的に距離をおくことによって——離れることなどできないのである。したがってこの形姿を、何らかの口実によって、例えば、「私はその場に居合わせなかった」とか、「私はキリスト教会に属していない、まだ洗礼を受けていない、何らかのキリスト教の宣教すら聞いたことがない」とかいう口実によって拒否しても無駄なのである。イエスに味方するか敵対するかは、たとえ我々の意識が繰り返し「キリスト教信仰」ないし「実存的決断」と呼ばれようと、我々の意識に関係するよりも、はるかに我々の実在に関係するのである。たとえ私がまだキリスト教の宣教を聞いたことがなくても、「聖書」と呼ばれる書物の存在について何事かを聞くことさえなかったとしても、いやそれどころか、聖書についていくらか知っている人間、あるいは「イエス」という名を心に留める人間が、地上にも、いかなる惑星にもはや存在しないと仮定しても、事実存在する人間は、一瞬たりとも、聖書に述べられた「マリアの子、イエス」という形姿に対して、時間的-実在的な関係、積極的ないし消極的に規定された関係を結ばないわけにはいかないであろう——それはまったく単純に、人間の事実存在それ自身の隠された永遠の事実による。つまり、創造者にして救済者である神ご自身が、みずから設定された限界、無制約的な限界を介して、人間とひとつであるということ、聖書によればあの時あの処で「イエス」として語られた同じ神が、その人のもとにも、その人がそのことを認めようと認めまいと、驚くべき比類なき忍耐をもって現在し給うということ、そしてイエスがかつて語った同じ無罪放免の言葉 (Freispruch) を、瞬間ごとに、聖霊を通して (すなわち、ご自身を通して) 明晰かつ判明にその人に知覚させ給うということによるのである。

しかし注意せよ、まさにそれ故に、神の語る無罪放免の言葉をこのように知

覚することの真理性は、当該の人間が「イエス」という名を、他の人から、例えば、プロテスタントの牧師ないしローマ・カトリックの教皇から、聖書ないし教会的伝統を介して聞いたことがあるか否かにまったく依存していない。神の永遠の言葉を聖霊によって真に知覚することは、「イエス」という名を感覚的な耳でかつて聞いたことがなくても、確かに起こり得るのである。そのことがひとたび現実に起こるならば、それはおのずから現われて、必ずしも言葉によるわけではないが、その実在性において、必然的に聖書におけるイエスの言葉と調和的に共鳴する。我々は新約ならびに旧約聖書それ自身において、このような可能性、いな現実性についての明白な証言を、もし我々が聖霊によって文字への信仰から——名前は「キリスト教」であるが根柢においてパリサイ的-ユダヤ教的な伝統から——自由になってさえいれば、いくつも見出さないのであるか？

あるいは「マリアの子イエス」という歴史的な形姿を「徴」と呼ぶことによって、ただちに「仮現説」「グノーシス主義」等のまったき異端に陥ることを恐れるのであろうか？ しかし現実には、このような敬虔な恐れそれ自体が、次のことに対するひとつの顕らかな徴にすぎない。すなわち、まさにイエスの生と死についての聖書的証言において我々に顕らかにされたような・キリスト教的意味における・事柄についても徴についても、当該者自身が、かれの敵対者たちと同様に理解していないということ、かれの理解がどんなに良くて、イエスの神的ないし人間的なペルソナについての異教的-ユダヤ教的な理解から、かれがまだ完全には自由になっていないということ、このことの顕らかな徴にすぎない。なぜなら、その際にかれがひそかに思っているのは、イエスの生と死という歴史的-現実的な形姿を「徴」と見なすことによって、「インマヌエル」ないし「神ご自身が我々罪人とともにおられる」という福音の事柄そのものが、失われざるを得ないということだからである。しかしそのようなことは、私の考えでは、ただ次のことから生じる。すなわちかれが、知らないうちに、みずからのペルソナを神のペルソナから分離した現象として表象し、し

たがって後者〔=神のペルソナ〕を抽象的な超越的主体として、そして徴一般をそのような主体に依存した現象としてしか、例えば虚空に漂う橋のようにしか、表象しないことから——そしてこのような通俗的な表象図式にとらわれたままで、イエスの形姿の神学的な考察に向かうことから、生じるのである。このことから、かれがおおいに心配せざるを得ないのは、「神の身体的な現在」が、あるいは現代の神学者の言い方をすれば、「主なる神との実存的な出会い」が、かれ自身から、そもそも人類一般から失われてしまうのではないか、ということである。それ故に、かれにとって、イエスの地上の生をひとつの徴と見なす見解は、イエスの生から、神的ならびに人間的な活ける実在的内容をすべて奪い、ついにはイエスの生をたんなる仮象ないしたんに形式的に思考された物（Gedankending）にまで貶めること以外の何もかも意味し得ない〔ということになる〕。

しかし精しく見れば、致命的な誤りは、まずもって、我々がイエスの地上の生をそのような意味におけるひとつの徴と見なすことにあるのではない。そうではなく、根柢において、我々が最初に無意識のうちに次の前提を受け入れたことの内に、すでに潜んでいるのである。それは、見かけは自明のように見えるが、実際にはまったく倒錯した前提、すなわち人間が、まず初めに、一般的に、たしかにこの地上においてであるが、主なる神から離れて事実存在することができ、あるいはそのつとすでに現実的に事実存在しており、しかる後に、或る機会に何らかの特別な場所で神と交流するようになる、という前提である。かくして初めから、イエスの人間的ペルソナ、その歴史的な行為と言葉（すなわち現実的な人間的形姿）の持つ実在性が、我々の精神的な視野から失われてしまっていたのである。その「徴」が我々の精神において現われる前に、我々はすでに、眼を開いたまま、我々自身によって案出され夢想された世界に陥ってしまっていたのである。我々がその〔=案出され夢想された世界の〕虚無性を我々自身に対してもはや隠すことができなかつた時でさえ、人間的形姿を取った唯一の眞の神を、すなわち、我々をその虚無性から自由にしてくれた

「イエス・キリスト」を、我々は「信じていた」。このことはたしかに理由なしに起こったことである。しかしながら残念なことに、我々の内に、あの最初の誘惑的な前提がなおひとかげら残っていたのであり、その限りにおいて、我々の「イエス・キリストに対する信仰」はなおいっそう根深い非現実性に陥らざるを得ず、その非現実性からの目覚めはそれだけいっそう難しくなったのである——これはひとつの状態、そのような非現実性として「キリスト教会」という歴史的存在によって日夜新たに養われるひとつの状態なのである。[かくして次のような問いが發せられる。] 洗礼、サクラメント、ついにはイエス・キリストの人間の形姿も「たんなる徴」ではないのか、そしてそのような徴は、事柄である福音それ自身と本来何の関係もなく、それ故にまさに福音の本来の内容ないし福音の真の宣教のために、福音から分離されるべきであり、その方がより良いのではないのか？ あるいは、そのような徴は貴重な一種の「暗号」ではないであろうか、そして我々はそれを我々の自由な情報伝達によってそのつど実存的に「暗号解読」すべきであるが、二〇世紀の啓蒙された自由な人間である我々は、そのような暗号を唯一の神ご自身の直接的な啓示とけっして見なすことができないのではないのか？ ——こういった「自由主義的」な問いは、かの甘美な夢の・今日だれの目にも明らかな・必然的な結果にすぎないのである。このような甘美な夢を、我々は「イエス・キリスト」ないし「人間的自由」の名のもとに、現在の世界においてもなお繰り返し見続けようとしているのである。

しかしながらイエスという人間の形姿は、聖書によれば、唯一の神である主ご自身の直接の啓示である。ただ、強調しておくが、この啓示が遂行されたのは、神(Ihm)ご自身によって永遠に定められた・したがってイエスという人間の形姿の力によっても踏み越えることのできない・むしろまさにそのことによって・誰の目にも見え得るように証された・限界を通してであった。時間的世界の内部における神のそのような啓示として、イエスという人間の形姿は、おのずからひとつの現実的な人間的生であるが、同時に完全な徴、実在的な永

遠性と時間性のあいだのかの唯一の普遍的な限界を表す・すべての徴のなかの徴、すなわち、唯一の主なる神ご自身の徴である。この唯一の主なる神は、まさにこの同じ限界を通して、永遠から永遠にわたって、我々罪人、有限で卑小なおのおのの被造物と、実際に実体的に一つであり、この神に対しては、我々の原罪ないし悪魔自身もまったく無なのである。そこから他のすべてが正しく説明され得る・このような唯一無比の意味において、イエスの形姿はひとつの徴、肉の耳で聞き得る・父なる神の我々罪人に対する・呼びかけであり、我々を神 (Ihm) のもとへ、かの限界へ、人類の永遠の故郷へ、すべての被造的な現実存在の共通の基盤へ、呼び戻すのであり、その基盤それ自体が、我々各人に、「悔い改め」(metanoia) を、我々に生まれつきのかの倒錯的前提から徹底的に方向転換することを、要求するのである。それに対して、イエスの地上的生の徴という性格を、不安のあまり否定する者は、知らず知らずのうちに——最初はたしかに敬虔かつ謙虚な仕方、歴史的な「ナザレのイエス」というひとつの時点においてだけであるが、次には不可避的に到るところで——かの聖なる限界を踏み越え、徴を事柄そのものとしてしまい、完全な「神の像」(Imago Dei) を「唯一の神ご自身」へ変え、この世でもっともひどい・もっとも仮面を剥ぎにくい・偶像へ変えて、自己義認的神話論の虚無性へ陥ることになる。この神話論は、「狭き門」の傍らを通り過ぎる「広い道」以外の何ものでもなく、その道を歩まぬようにイエスご自身が我々におおいに警告されたのである⁶⁾——このような神話論は、どのような洗練された形式で現われようと、真正の学問、芸術、道徳および宗教とはまったく何の関係もない。この神話論はすでに聖書それ自身のなかに潜んでいるのであろうか？ あるいは、聖書の信仰に矛盾する・我々の神学の・逸脱にすぎないのであろうか？——これに詳細かつ正しく答えることは、もちろん私の力量をはるかに越えている。私には次のことだけが、明晰であるように思われる。

上で繰り返し説明されたように、聖書の叙述による「イエス・キリストのペルソナ」の驚くべきことは、とりわけ次の点に存している。このペルソナにお

いて、歴史において現実に発生した形姿が、その永遠に実在的な・発生根拠および展開根拠、すなわち、その絶対に隠された原像(Urbild)であるところの歴史の唯一の主と、かくも直接的にひとつであるという点に存している。したがって、ここでこのふたつ、事柄〔=原像〕とその徴〔=形姿〕をお互いから分離しようとする者は、神、人、およびそれら相互の関係について、避けがたく異教的-異端的な空しい思弁に陥らざるを得ないのであった。もちろん使徒たちは、この過ちに陥ることはけっしてなかった。「イエスが生まれた」ということ、それだけがかれらにとって福音であった。かれらにとって罪の赦しも義認も、ゴルゴタでのイエスの十字架以外になかったのであり、このことは、福音書記者ヨハネにおいても述べられている通りである。ヨハネにおいては、イエスの形姿がその永遠の原因から説明されるのを、もっとも明晰に聞くことができるにもかかわらず、そうなのであった。その徴は使徒たちにとって即事的に(sachlich)不可欠である、あるいはむしろ、その徴は徴としてそれ自身事柄に即している(sachlich)と、或る意味においてたしかに言った方がよいし、そう言わなければならない。しかしこのことは、私の考えでは、聖書の叙述によれば、イエスのペルソナにおけるふたつの契機のあいだに原理的な区別が含まれていない、などということを謂っているのではない。ふたつの契機の不可分性は、それらが区別できないということではないからである。使徒たちがこの区別に組織的な表現を与えなかったということは、かれらがまったく区別を考えなかったとか、区別について語らなかったとかいうことではなく、そのこととはまったく別のことである。まさにそれ故に、古代の教父たちは、イエス・キリストのひとつのペルソナにおける神的な本性と人間的な本性を、お互いからかくも厳密に区別したのであった。ただ教父たちは、みずからの神学的-形而上学的思索において、キリスト教的にまだ十分に首尾一貫しておらず、イエスのペルソナの統一における・同じ区別の・二重の構造を、洞察していなかった、あるいは今日の言葉の用法によれば、神と人のあいだの実体的および作用的(歴史的-形姿的)な統一を、あるいは後者の作用的統一それ自身

の内部における本質と現実を、お互いから精確かつ明確に区別していなかったのである。

教父たちがイエス・キリストのペルソナを深い信仰をもって分析する際に、まだこのような結論を導き出さなかったこと、すなわち、かれらがイエス・キリストのペルソナの二つないし三つの契機をお互いから明確に区別しなかったこと、このことは誤りというのではなくて、学問的な方法ないし分析において、その当時の人類がまだそこまで十分に成長していなかったことのひとつの徴にすぎない。しかし、子どもは時とともに成長しなければならず、そうでないなら不可避的に幼稚になり、すなわち、その子の最上のものである根源的な子どもらしさを失い、ただ子どものように振舞うにすぎず、現実にはたんなるソフィスト的な弁論術に身を委ねることになる。我々現在のキリスト者にとって、神学的分析という危険な道においてさらに一步を進めずに、安らかに留まることのできるような安全地帯は、もはや存在しないように私には思われる。つまり我々は、イエス・キリストのひとつのペルソナにおいて、かの二つないし三つの契機を、たしかにその不可逆な順序と不可分な関連においてであるが、きわめて鋭くお互いから区別しなければならない、さもなければ我々は次のような事態に到るのである。その事態とは、まず〔イエス・キリストのペルソナの〕最初の二つ契機において、次に不可避的に三つのすべての契機において、お互いの区別が不明確になるだけでなく、お互いを修復し難く混ぜ合わせ、やがて「全能の神の奇蹟」の名のもとに、それらの不可逆な順序を逆にし、ついには神の実体と人間の実体（主体ないし本性）を、まったく恣意的に分離して再び結びつけるようになるのである。

後者は、「滅びに到る広き門」を通る広い道であり、その道を通して我々は必然的に、一方で、非合理的な伝統主義の虚無性へ再び落ち込み、他方でそれと同時に、見かけは新しいが・例えば「実存的」というような・根柢において古色蒼然たる・おごそかな根拠づけしか探し求めない・ありとあらゆる思弁に陥る。このような思弁は、その方法において、「自由主義」を自称する今日の

世界強国にあまりに類似している。それに対して前者は、「いのちに到る狭き門」を通る狭い道であり、その道を通して我々はすべての空しい心配から自由になって、必然的に、こころからの対話へ、神のすべての被造物との霊的な共同作業へ、したがってたんにキリスト者やほかの人間とだけではなく、鳥や百合たち、それどころか石や風たちと、すなわち全自然ともなる共同作業へ到達することになる。しかし、とくにキリスト教会とキリスト教神学にとつて、そこから何が帰結するかを、我々は次の章で簡単に見ることにしたい。

IV. イエス・キリストのひとつにして三重のペルソナという光のもとで 現在の神学的状況への一瞥

A. 伝承されたキリスト教一般に対して帰結すること

イエス・キリストのひとつにして三重のペルソナから出発するこの道において、我々は第一に、普通の意味におけるキリスト教の「絶対的な唯一無比性」や「排他性」にもはや固執することはできない。なぜなら、歴史内部のあの時あの処で、イエス・キリストとしてご自身を啓示されたのと同じ唯一の真の神が、到るところ・すべての人間のもとで・永遠から永遠に向かってではなく、したがってこの〔イエス・キリストという〕人間が誕生して死んだ後およびそれ以前には、ご自身を啓示していないことになってしまうからである。ましてや神が「キリスト教会」の説教と sacrament においてしか臨在しておられないなどということは、あり得ないからである。否、イエス・キリストのひとつのペルソナの第一の契機、すなわち、神と神によって創造されたこの被造物〔=イエス〕のあいだの実体的統一、ないしこのひとつのペルソナにおける神と人のあいだの絶対に踏み越えることのできない限界は、そのようなものとして、永遠に新たで・あまねく実在的な・共通の要素 (Element) であり、その要素から一度でも離れることは、ナザレのイエスのみならず、いかなる被造物、いかなる人間も、それどころかいかなる罪人もできないのである。原罪とは、この

ような人間において生まれつきの・自分自身によって克服できない・不条理な傾向にすぎず、この〔離れることができないという〕不可能性を可能かつ現実にするように、人間を絶えず誘惑するのである。イエスが我々のところへ来られて、神がご自身をとくにイエスとして啓示されたのは、この唯一の要素それ自体を、もう一度設定するためなどではない——そんなことは可能でもないし必要でもない、なぜなら、その要素が失われたことなどなく、失われることもあり得ないからである。そうではなくて、むしろこの要素を新たにはっきりと我々に示し、知覚させるためなのである。実際には、我々は、「失われた」と思われているこの要素のなかに、無条件にすでに置かれているのである。したがってこの要素を、それが神によって顕らかにされたのとちょうど同じように、〔新たに〕聖霊によって知覚する者は、見かけはキリスト教的に見える空しい企てから、すなわち、唯一の神ご自身によって動かし難く定められた・人間的な生の・唯一の要素を、何らかの聖なる手段ないし或る「媒介者」によって——例えばイエス・キリストの十字架の宣教によって——置き換えようと試みる空しい企てから、決然と身を翻して、共通の要素というこの基盤の上で、共に人間として働くのである。我々キリスト者は、この基盤の上へ、イエスご自身、またすべての他の人間と同じ直線上に置かれているのである。それ故にキリスト教は、認識の真理ないし真正な生に関して、他の宗教ないし哲学に対して、どんなに秘かなものであれ、いかなるアプリオリな特権もあらかじめ持つことができないし、持つ必要もない。イエス以前ないしイエス以後のいかなる人間も、かれの名を聞くことなくして、同じ「三一」の神の判明な認識に達することがなかったというのは、ひょっとして歴史学的事実であるかもしれない。しかし、我々はそのことに惑わされてはならない。もし我々が哲学者や他宗教の聖職者に出会って、かれらが我々自身と同様に真実であるか、あるいは幾多の点で我々自身よりもっと純粹であったとしても、驚くようなことがあってはならない。むしろ我々はその際、その出会いに対して、イエスとしてご自身を啓示された主なる神に感謝し、神の国のために喜んでかれらと共に働

くべきなのである。

次に第二に、上のことからおのずと帰結することなのであるが、今度こそすべての秘教的な伝統主義から、私の考えでは、たんにローマカトリック的な教皇制のみならず、プロテスタント的な「聖書原理」からも、我々はまったくラディカルに絶縁することになる。もっとも、啓蒙された自由主義的な精神とされている人たち、すなわち、かの無条件に前提された要素がなくても事実存在できると信じている人たちと共に行くべきだ、というのではない。そうではなくてむしろ、聖書と使徒的伝統を、それらのほんらいの根源、基盤であり、同時に目標であるこの要素から、瞬間ごとに新たに受け取り、すなわち、それら〔=聖書と使徒的伝統〕が神の前にあるのとまったく同じように批判的に受け取り、すべての学問に抗して虚無に向かって歩みを速める現代世界のただ中で、それらをいっそう純粋に発展させ、保持するためなのである。

第三に、その際には上のことと必然的に関連して、我々が「歴史的な正しさ」についての問いにおびやかされることはもはやあり得ない。それは、聖書のイエス像がその歴史的な原像〔=歴史的イエス〕と完全に合致している〔=前者〕か、あるいは聖書のイエス像がむしろ原始キリスト教によって構成されたものにすぎない〔=後者〕のか、という問いであり、後者の構成されたものは、感覚的に知覚され得る諸事実に関してのみならず、精神的にしか把握され得ない個人的性格に関しても、ときおり多かれ少なかれ原像〔=歴史的イエス〕と異なるのである。もし前者が起こると仮定すれば、それどころか、我々自身がイエスの同時代人としてかれ自身を個人的に見たり聞いたりしたと仮定しても、当時の我々が、聖書の叙述によってしかかれの形姿を表象できない今よりも、必ずしもかれをより良く理解し得たわけではない。逆に、後者が起こると仮定するならば、我々は聖書のイエス像を介して、唯一の福音を、より純粋かつ明晰と言わないまでも、前者に劣らずはっきりと知覚し得るであろう。なぜなら、使徒たちが歴史的な原像〔=歴史的イエス〕からいささか逸脱したとしても、その際にかれらは積極的なものは何も失わず、いやまさに逆で、かれらはそこに

含まれた積極的なものを、まったく純粹に、すなわち、積極的なものがその實在的な根源（神の言と肉のあいだの永遠に驚くべき実体的な統一）から現われ出るままに表現し、写し取ったのである。このことは、神の言と等しい同じ聖靈によってしか、かれらに可能かつ現実とはならず、この聖靈によって同じ言が、処女マリアによって生まれ、或る特定の間「イエス」として生まれたのであった。その限りにおいて、この使徒的な「イエス」像は、歴史的に現実に現われ出た「原像」〔=歴史的イエス〕の模写像にすぎないが、この「原像」それ自身と同じ實在的な基盤のうえに立っている——なぜならこの「原像」は、同じ平面の唯一の主によって一度限り描かれた・神の完全な・自画像（神の像）だからである——、しかし他方で、逆に、使徒たちによって描かれた・かの模写像は、空間的かつ時間的に規定された（使徒という）人間の働きの結果として、それ自身、次のような歴史的な原像なのである。すなわち、この歴史的な原像〔=使徒的なイエス像〕は、かの「原像」〔=歴史的イエス〕とまったく同様に、同じ平面の踏み越えることのできない聖なる限界を介して、その平面の主（唯一の絶対的な原像）と関連するとともに、そのような歴史的な原像として、後続のもろもろの世代によって再び写し取られ得るのであり、しかも常に、異端者や疑似正統主義者においてのように、たんに肉的に、あるいは、眞の教會的伝統において起こったし、これからもさらに起こるように靈的に、すなわち聖靈によって、写し取られ得るのである。

したがって「イエス」という歴史的な原像が原像である^{ゆえん}所以は、創造者である神ご自身の原像性^{そのもの}（*die Urbildlichkeit*）ではない。前者は、この絶対的な「ない」によってのみ、後者〔=神ご自身〕から厳密に区別された模写像として、後者〔=神ご自身〕と直接的にひとつであり、その限りにおいてのみ、後の世代にとって歴史的な原像として役立つことができる。歴史的世界の内部での原像－模写像－関係は、唯一の創造者である神とおのおの事実存在する人間の被造物のあいだの原像－模写像－関係の反映としてのみ、成立し展開する。唯一の・永遠の・普遍的な神が、その瞬間的な個々の被造物と、神（Ihm）

ご自身によって創造と同時に措定された・けっして踏み越えることのできない・限界を介して、直接的にひとつであること、このことがおのずから (eo ipso) 意味するのは、この限界における神の永遠の本質と〔個々の〕瞬間的な現実存在が、ふたたび、この踏み越えることのできない限界を介して、相互から区別されるということであり、まさにそのことによって直接的に相互に関係させられるのである。しかし、次のこともおのずから (eo ipso) 意味される。後者のもろもろの実存的-事実的な形姿の内部において、ひとつの形姿が唯一の尺度として、他のもろもろの形姿がそれによって測られ得るものとして、これらふたつの〔歴史的な〕形姿もまた、本質において不可逆的であるが、事実存在において相対的に相互から区別されて、ないし相互に関連し合って現象する、あるいはむしろ、これらふたつの〔歴史的な〕形姿は、歴史的にみずからを実現するという必然的な傾向を有する、ということである。イエスの形姿、すなわち、聖書によるところのイエスの地上の全生涯は、この完全な唯一の人間の尺度が実現されたもの以外の何ものでもない。したがって〔イエスの形姿という〕この唯一の人間の尺度は、その積極的な内容と実在的な由来によれば、人間的というよりむしろ神的と呼ばれるべきである。それ故にこの〔聖書におけるイエスという〕形姿は、その歴史的な原像である「ヨセフのむすこ」を完全に正確に模写した像であるか否かに関わらず、それによってのみ我々の霊的な眼が開かれる唯一の道として、我々に役立つのである。かくして、おのおのの現実に事実存在する人間的形姿を、あるいはそのような人間的形姿の活ける諸関係ないし被造物の歴史一般を、まったく客観的に、すなわち、それらが在り、動くがままに、観察し分析することができるのである。その際、先ず、聖書のイエス像がすくなくともその個人的な性格に関して歴史学的にまったく正しいかどうかを問い、その次に初めて、〔その問いに対する〕肯定的な答えに基づいて聖書の聖性を基礎づけようとするのは、無益なことではないのか、いやそれどころかまったく誤った試みではないのか？ いや、それ以上であり、まったくの不信仰と呼ばれるべきである。なぜなら、その際には、「イエス・キリス

トへの信仰」という名のもとに、イエス自身によってしばしば繰り返された警告に反して、真の創造者にして救済者である御方から、ないし神の国（人間的生の普遍的な・かの故郷）から、自分自身と仲間を引き離し、神に代わって自分自身を審き主にするという絶対に不可能なことを、自分のために要求することになるからである。このことは必然的に、一方で、我々を空しい護教論へと駆り立て、他方で、そのことへの反動として、同じく空しいもろもろの問いや探究へ、例えばマリアはほんとうに処女であったかというような問いや探究へ、導くのである。すべてこのようなことは、もちろん学問一般とまったく関係がなく、ましてや本来のキリスト教神学とまったく無関係である。——「キリスト教」神学が、真正のキリスト教的な学問、それとともに、ひとつの・偏見にとらわれたたのようなイデオロギーからも解放された・誰によっても直に理解され得る・真の学問となることができるのは、神学が聖書のイエス像に導かれて、かの普遍的要素へ、その真実の主へ、還帰するときだけである。この主は、人間イエスに、それとともにすべての人間に、キリスト者にも異教徒にも、実際に近くにおられ、この主を通して我々は、日毎に、「創造の最初の日」のようにまったく新しく、聖書を畏れつつ批判的に受け取るのである。このことが我々罪人に許されているということが、イエス・キリストの喜ばしき福音であり、このイエス・キリストを我々は神の大いなる奇蹟として、ただ感謝しつつ受け入れることができるのである。一方で、キリスト教のいわゆる絶対的な排他性に固執し、同時に他方で、真の学問ないし地上での美しい調和を打ち立てようとすることは、パリサイ人のあまりに甘美な夢であろう。パリサイ人は、キリスト教会の統一に到ることも、ましてや全世界の永遠の平和に到ることもなく、逆にキリスト教会の果てしないシスマ〔分裂〕を、ついには人類の持続的な不和を引き起こすであろう。（つづく）

訳註

- 1) キリスト論におけるイエス・キリストでは、人(Person)ないし「人間的ペルソナ」の存在と働きが、「神的ペルソナ」ないし「神の第二のペルソナ」(=神の言、神の御子)の存在と働きとひとつ(区別即統一)である。したがってPersonは、「ペルソナ」と訳さざるを得ない。「ペルソナ」という言葉については、著作集2巻228, 234, 235頁参照。)
- 2) 「神の像」とは、人間によって表現された神(の像)、あるいは神が人間においてみずからを表現した像のこと。著作集7巻296頁、『バルトとマルクス』165頁参照。「神は人を神に似せて(zu seinem Bild)創造した、人を神の像(Gottes Bild)として創造した」(創世記1章27節)。
- 3) バルトは聖書の記述をSageと呼んだ。著作集2巻488頁参照。
- 4) 原文のマタイは誤記。
- 5) 歴史的世界に存在するすべてのものが、創造者なる神を表わす象徴ないし徴である。(例えば著作集第7巻307頁参照) したがって歴史的世界そのものが徴的であり、徴世界である。しかし、創造者と被造物のあいだに置かれた絶対の無ないし闇は、そのような徴世界に属さない。
- 6) マタイ7章13節、ルカ13章24節参照。滝沢自身の説教「狭き門」については、『往復書簡』231-43頁参照。